

1939年に生まれ、母親の手一つで育てられた柏木哲夫氏が医師を目指したのは、母親の職業が看護師だったことが大きい。小学校が終わると母親の働く病院に通うという少年時代を過ごした柏木氏は自然と医師を目指すようになっていた。

柏木氏は母親の出した条件「下宿せず通学できて、授業料が高くない国立大学」である大阪大学医学部に入学。在学中に書物を読みあさることで出会った精神医学の道に進むことを決め、1965年に卒業。同大学の精神科に入局した。

もっと日本にホスピスを 最期まで安らかに生きるという選択



> ホスピス開設30周年記念講演会

1939年兵庫県淡路島生まれ。1965年大阪大学医学部卒業。同大学精神神経科に3年間勤務後、ワシントン大学に3年間留学。1972年に帰国し、淀川キリスト教病院に開設された精神科に医長として勤務。1984年同病院にホスピスを開設しホスピス長を務め、2012年には同病院に日本初の子どもホスピスも設立した。教育者としては、1993年に大阪大学人間科学部教授となり、2004年に定年退官後、金城学院大学人間科学部教授、大学長を経て、2012年から2015年まで同大学の学院長を務めた。2013年から淀川キリスト教病院理事長。現在は公益財団法人ホスピス・緩和ケア研究振興財団理事長だけでなく、Asia Pacific Hospice Palliative Care Networkの顧問として国際的な活動を続けている。

1972年、淀川キリスト教病院の精神神経科の医長として帰国。リエゾン精神医学の実践を試みるが、環境が整わず納得のいかない日々が続く中、1977年に新聞記事でイギリスのホスピスが日本に初めて紹介されると、柏木氏はどうしても現場を見たいという衝動にかられ、同病院の院長にイギリスへのホスピス視察を嘆願。その結果イギリスに渡り、世界のホスピスの母と呼ばれるシシリー・ソンドラス博士主催のホスピスに滞在する機会を得た。「そこで私の人生は変わったと言えます」と語る柏木氏は「ホスピスが自分の本当にやりたいこと」とだと確信し帰国。帰国後、1981年からホスピス建設に臨み、資金捻出のため1年以上奔走。1984年に

同病院内に日本で2番目のホスピス・緩和ケア病棟を開設。1993年まではホスピス長、その後は名誉ホスピス長として2,500名以上の患者を看取り、2012年には日本初の子どもホスピスを開設した。また、緩和ケアの推進活動として、1977年から「日本死の臨床研究会」の設立を発起。1991年には「全国ホスピス・緩和ケア病棟連絡協議会」(現・日本ホスピス・緩和ケア協会)を設立。1996年には「日本緩和医療学会」の設立に尽力。2000年に「日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団」を設立するだけでなく、教育者として大阪大学や金城学院大学で教鞭をとるなど、緩和治療の先駆者として

新しい医療分野を開拓し、後進の育成に努めてきた。

長い間、医療現場において「死は忌み嫌うもの」であった。しかし、柏木氏は「人は死を背負って生きている」と言う。生死は常につななのだ。そんな柏木氏の開拓してきた「死を含めて患者さんをケアするのが医療である」という緩和ケアの考えは、日本の社会が成熟するにつれ一般的な概念となってきた。高齢化社会を迎えた今、ホスピスが提供する「安らかな死」という選択肢の重要さは増すばかりなのである。

*リエゾンとは橋渡しを意味し精神科医が各科と協力して患者さんの精神的ケアを行う医療



> ホスピス開設時、米国宣教師(右)と共に

かわぎ てつお
柏木 哲夫 Tetsuo Kashiwagi

宗教法人日本南プレスビテリアンミッション 淀川キリスト教病院 理事長
公益財団法人日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団 理事長
Chairman, Yodogawa Christian Hospital
Chairman, Japan Hospice Palliative Care Foundation

推薦者 紀伊國 献三
公益財団法人笹川記念保健協力財団 会長

